

語られたアドラー心理学Ⅱ

尾中映里（高知）

要旨：本研究は、「語られたアドラー心理学」（アドレリアン第 23 巻第 2 号）の続編の研究である。「語られたアドラー心理学」では、一定の面接方法と集計方法を用いて、アドラー心理学の学習者が語った言葉を数値化することによって、要素ごとに特徴のあるインフォーマントが明らかになった。しかし、具体的な記述内容までにはいたらなかったため、具体的な記述内容についてより踏み込んだ研究を行いたいと考えた。

そこで、前回の研究とは違う視点で、性別、業種別に分類し、一定の集計方法を用いて、語りを検証した。性別は男女に分け、男性的なアドラー心理学理解の代表例、女性的なアドラー心理学理解の代表例を挙げながらその特徴を示した。業種別では、治療者のアドラー心理学理解の代表例、教師のアドラー心理学理解の代表例、その他の人々のアドラー心理学理解の代表例を示し、考察を行った。その中から、一人一人の語りの中には、インフォーマントが共通して受け取っている物語と各個人の物語があることを明らかにできた。そして、各個人の物語は個人によって受け取られている物語や個性的なライフスタイルによる物語の部分がさらに明らかとなった。

キーワード：アドラー心理学、理論、個性的理解、語り、質的研究

1. はじめに

本研究は、「語られたアドラー心理学」（アドレリアン第 23 巻第 2 号）の続編の研究である。

「語られたアドラー心理学」では、アドラー心理学の学習者に対して、「アドラー心理学とは何か」ということを社会的ないし人類学的に調査して、日本のアドレリアンの社会集団の中で、どのようにアドラー心理学が受けとられているかを調査研究することを目的に行った。一定の面接方法と集計方法を用いて、アドラー心理学の学習者が語った言葉を《相手》《機能》《要素》の 3 要素で 3 つの尺度ごとに分類すると、個人の語った言葉が数値となり、個人グラフに表すことができた。この個人グラフからは、A さんは、《自分》に対して《行為》について《思想》を使っているという傾向が強いということが分かるというような個人の傾向が明らかになった。

また、別の方法で 30 名の結果を偏差値のグラフで表した。このグラフからは、30 名のインフォーマント中で自分がどの位置に位置しているのかが分かり、さらに、3 つの《要素》を尺度ごとに、統計処理を行うことで、要素ごとに特徴のあるインフォーマントが明らかになった。このような結果から、「個性のあるインフォーマント」と「個性のないインフォーマント」に分けて考察したり、3 要素の特徴からも考察したりすることができた。しかし、具体的な記述内容までにはいたらなかったため、具体的な記述内容についてより踏み込んだ研究をしていきたいと考えた。

本研究では、まず、先行研究「語られたアドラー心理学」の基礎データを基にして、インフォーマントを性別、業種別で分類し、先行研究とは違う別の観点で見たいと考えた。そして、基礎データの統計処理を行った後、その特徴について典型的な例を挙げながら、研究を進めていくこととした。

なお、本論文は、2010年10月15日から10月17日までにおいて開催された、第27回日本アドラー心理学会総会において宿題研究発表をしたものを、加筆してまとめたものである。

2. 研究の目的

研究の目的は、アドラー心理学の学習者に対して、「アドラー心理学とは何か」ということを社会的ないし人類学的に調査して、日本のアドレリアンの社会集団の中で、どのようにアドラー心理学が受けとられているかを調査研究することである。

「社会的ないし人類学的に調査する」というのは、次のようなことを意味する。

- (1) 現場に行き、人々から実際に聞きとったデータを元にする。
- (2) 多くの人々の平均的傾向を見るのではなくて、一人一人の個性的かたよりを見る。
- (3) そこからひるがえって、日本のアドレリアンの社会集団の中でのアドラー心理学の受けとられ方を考える。

3. 研究対象

研究の対象は、前回の「語られたアドラー心理学」と同じデータを使用したため、同一対象者となる。2007年4月から2009年8月までの間に話を伺った30名である。日本アドラー心理学会の会員であり、ある程度アドラー心理学学習歴の長い人で、私が直接会って話を聞くことが可能な人である。ここで言う、「アドラー心理学歴の長い」というのは、あくまでも対象者の認知であり、対象者が半年でも長いと思っておれば長いことになるし、10年でも短いと思っておれば短いということになるということである。

また、話を聞かせていただくときに、インタビューについて事前に文書あるいは口答で説明し、聞き取り調査への承諾が得られた人である。

4. 研究方法

「語られたアドラー心理学」の基礎データを基にする。「インフォーマント」を性別、業種別等で分類し、「語られたアドラー心理学」の研究とは違う別の観点で見たいと考えた。基礎データの統計処理を行った後、その特徴について典型的な例を挙げて考察する。基礎データの統計処理は、偏差値 = (個人の素点 - 全体の平均) / 標準偏差で計算をしたもので、全員についての偏差値の平均をとると、ゼロになる。つまり、ゼロは全体の平均ということになる。

5. 結果

(1) 性別で分類

インフォーマントを「男性」、「女性」に分けてそれぞれの性別の違いによって特徴的な事柄を示す。

男性は6名で、Aさん、Fさん、Rさん、Tさん、Wさん、Yさん。

女性は 24 名で、B さん、C さん、D さん、E さん、G さん、H さん、I さん、J さん、K さん、L さん、M さん、N さん、O さん、P さん、Q さん、S さん、U さん、V さん、X さん、Z さん、AA さん、BB さん、CC さん、DD さん。

① 《相手》の分布結果

図 1 は、《相手》の分布結果である。男性は、《人々》0.63、《自分》- 0.15、《家族》- 0.52 である。男性は《人々》については、全体の平均よりも + 0.63 となっており、《人々》について語る事が圧倒的に多いのである。逆に、《家族》のことについては、全体の平均から - 0.52 となり、《家族》のことについて語る事がかなり少ないのである。

一方、女性は、《家族》0.13、《自分》0.03、《人々》- 0.15 である。女性は《家族》0.13 となっており、《家族》について語る事が全体の平均より少し多く、語っている。《自分》0.03 はほとんど全体の平均となっている。

このように、女性は《家族》、《自分》、《人々》とともに3つの要素を同じぐらいの割合で語っている。

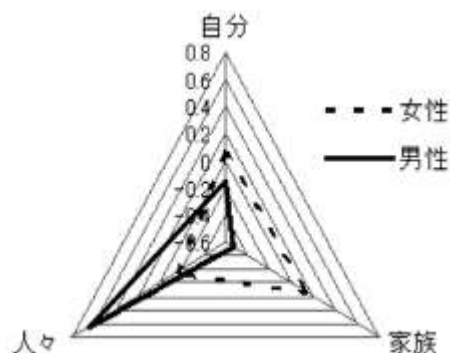


図 1

② 《機能》の分布結果

図 2 は《機能》の分布結果である。男性は、《感情》0.75、《思考》- 0.37、《行為》- 0.44 である。男性は、《感情》について全体の平均よりも +0.75 となっており、《感情》について語る事が特に多いのである。その他の要素と比べても、顕著に現れている。逆に、《思考》- 0.37、《行為》- 0.44 となっており、《思考》や《行為》については、あまり語られていない。

女性は、《行為》0.11、《思考》0.09、《感情》- 0.18、である。《行為》0.11、《思考》0.09 でほぼ全体の平均となっており、《行為》、《思考》ともにほぼ同じ割合で語っている。《感情》については、全体の平均よりも - 0.18 と少し低く、やや語りが少ない傾向にある。

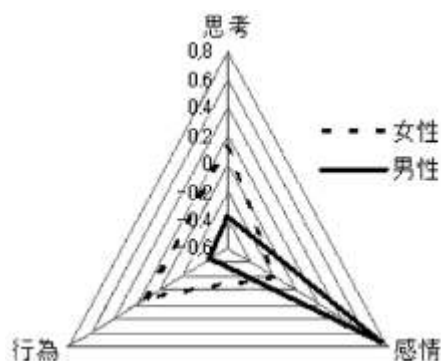


図 2

③ 《要素》の分布結果

図 3 は、《要素》の分布結果である。男性は、《思想》0.26、《理論》0.10、《技法》- 0.48、である。男性は、全体の平均よりも《思想》+0.26 となっており、《思想》について語る事が一番多くなっている。逆に、《技法》- 0.48 となっており、全体の平均よりも男性は《技法》についての語りが少なくなっている。

女性は、《技法》0.12、《理論》- 0.02、《思想》

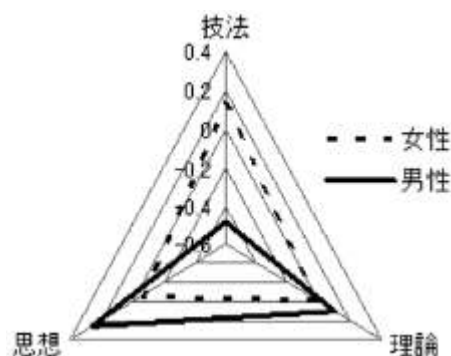


図 3

－ 0.06 である。《技法》は全体の平均よりも +0.12 で、女性は《技法》について語る事が多くなっている。《理論》や《思想》は《理論》－ 0.02、《思想》－ 0.06 で、全体の平均より少し低い値となっており、《理論》や《思想》についても平均的に語っている。

以上のようなことから、男性は、全体の平均よりも「《人々》+0.63・《感情》+0.75・《思想》+0.26」の値を示しており、「《人々》・《感情》・《思想》」について多く語っている。特に、全体の平均よりも高い値を示している《人々》や《感情》については、それらを多く使って語っているという事を示し、ここに、男性の特徴が現れている。

女性は、全体の平均よりも「《家族》+0.13・《思考》+0.09 / 《行為》+0.11・《技法》+0.12」の値を示しており、「《家族》・《思考》 / 《行為》・《技法》」について多く語っている。女性の語りの特徴は、全体の平均値よりやや高い値で「《家族》・《思考》 / 《行為》・《技法》」の事について語っているということである。

④男性的なアドラー心理学理解の代表例

男性的なアドラー心理学理解の代表例としてRさんを取り上げる。次に示すようにRさんの個人グラフは、男性の平均値に近い値を示すグラフである。(図4、5、6)

Rさんの実際の語りの一部を記す。

「今では感情を使わずに、仕事の上でも、相手と同等の立場に立って、役割として仕事をやっていければいいのかなというふうに考えることができるようになった。できるだけ部下の考えを意識して、聞けるように意識して、なおかつ、自分と違うところでも感情を使わないで、話ができるように付き合っているかなと思います。まだ、感情を使っているんだなあと少し冷静に思えることもあります。ただ、基本的には、厳しいなというところが正直なところですけども。」

「その感情の目的は何かという、目的論を考えると、こっちも冷静になれるかなあ。感情を使ってこられてもあーこの方は結局コントロールをしたいのかなって、使っているんだなあと思うときはラッキーです。」

男性の語りの特徴をまとめると、男性は「《人々》・《感情》・《思想》」について多く語っている。特に、全体の平均よりも高い値を示している《人々》や《感情》については、それらを多く使って語っているということになり、ここに、男性の特徴が現れている。

男性は社会の中で仕事を持っている、働いているということが大きく関係していると考えられ、その人が所属している会社などの組織や社会の中の対人関係に関する事が多く語られている。そうした中では、《理論》・《思想》について考える場面が多いため、その割合が高くなっているのではないだろうか。

また、《機能》や《要素》については、すべての要素を含んで抽象的な言葉で語られている。

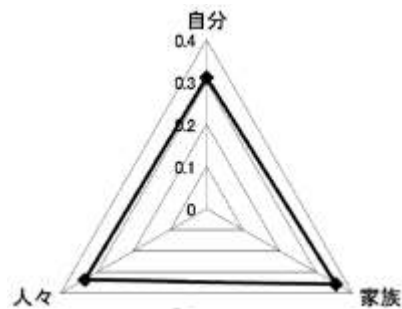


図4

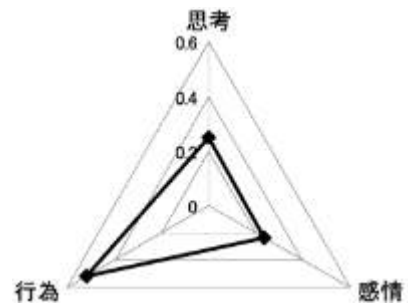


図5

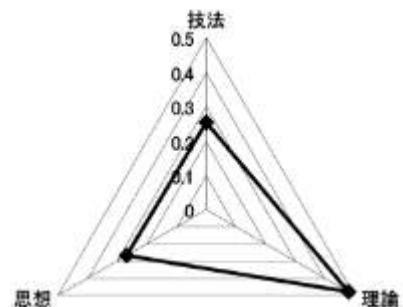


図6

⑤女性的なアドラー心理学理解の代表例

女性的なアドラー心理学理解の代表例として、Lさんを取り上げる。Lさんの個人グラフは、女性の平均値に近い値を示すグラフである。(図7、8、9)

Lさんの実際の語りの一部を記す。

「目標に向かう細かいプロセスを話し合っ、自分の折り合いをつけて、どう感情を収めて、それを変更しながらやっていくか、そういう細かいスキルみたいなものをアドラーで教えてもらった気がする。目標の一致に行くまでの長男との競争、次男との生活の共生、段取り、みたいなものを平行して考えておいたりその調整とかするときも、相手の都合とかも聴きながら、じゃあこの期間だけお願いしますとかものすごい調整をする。」

「感情は、あんまり使わなくなってきたけれども、やっぱり戻る。感情的になってなくても、どこまでが不適切なところに注目しないで、どこまでが意見として、きちんと伝えられるかな、っていうところが、すごく難しいところだなって思うんです。」

女性の語りの特徴は、全体の平均値よりやや高い値で「《家族》・《思考》 / 《行為》・《技法》」について語っている。《相手》、《機能》、《要素》の分布について、どれも全体の平均値に近い値になっている。

《相手》の分布では、《家族》の値が +0.13 になっていて、一番高い値になっている。女性の語りには、社会の中で仕事を持って働いている人も家庭で働いている人も家族のことが話題になり、語られた割合が多かったということではないだろうか。また、《自分》や《人々》についてもある程度平均的に語っている。

《機能》の分布では、《思考》・《行為》について、多く語られていたが、女性は、自分がどのように動くのか、自分のできることは何かを考え、考えながら行動しているということが考えられる。

《要素》の分布では、《技法》について、多く語られていたが、日常で起こっている事柄を技法中心に考えて、《理論》、《思想》を総合的に使って解決しようとしていると考えられる。

(2) 業種別で分類

インフォーマントを「治療者」、「教師」、「その他の人々」に分けてそれぞれの職業の違いによって特徴的な事柄を示す。「その他の人々」は、「治療者」と「教師」以外の職業に就いているか、または主婦である。(以下、治療者、教師、その他の人々と記す)

治療者は8名で、Bさん、Cさん、Dさん、Eさん、Fさん、Wさん、Xさん、Yさんである。

教師は12名で、Aさん、Gさん、Iさん、Jさん、Oさん、Sさん、Tさん、Uさん、Vさん、Zさん、BBさん、DDさんである。

その他の人々は10名で、Hさん、Kさん、Lさん、Mさん、Nさん、Pさん、Qさん、Rさ

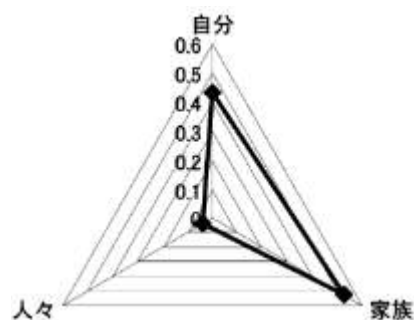


図7

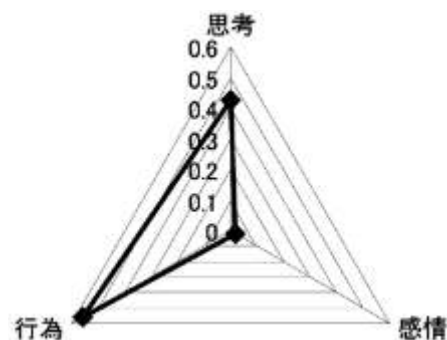


図8

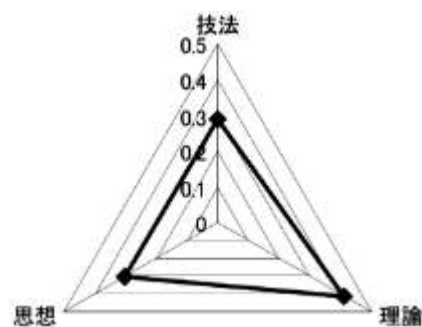


図9

ん、AAさん、CCさんである。

① 《相手》の分布結果

図10は、《相手》の分布結果である。治療者は、《人々》0.38、《自分》0.13、《家族》-0.54である。治療者は《人々》については、全体の平均よりも+0.38となっており、《人々》について語る事が比較的多いのである。逆に、《家族》の事については、全体の平均から-0.54となっており、《家族》の事について語る事がかなり少なくなっている。

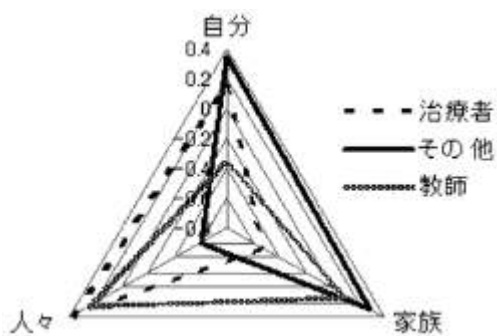


図10

次に、教師は、《人々》0.29、《家族》0.11、《自分》-0.38である。教師は《人々》0.29となっており、《人々》について語る事が全体の平均より多くなっている。逆に、《自分》について語る事が-0.38と全体の平均よりも少なくなっている。

その他の人々は、《自分》0.35、《家族》0.29、《人々》-0.60である。《自分》0.35、《家族》0.29と全体の平均よりも語る事が多くなっている。

その他の人々は、《人々》-0.60と《人々》について語る事が極端に少なくなっている。

② 《機能》の分布結果

図11は《機能》の分布結果である。治療者は、《思考》1.64、《感情》0.28、《行為》-0.76である。治療者は《思考》について語る事が全体の平均よりも+1.64と特に多くなっている。その他の要素と比べても、顕著に現れている。逆に、《行為》については、全体の平均から-0.76となっており、《行為》について語る事がかなり少なくなっている。

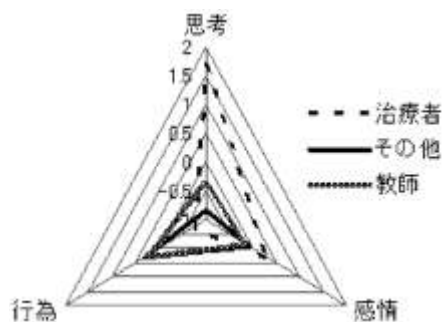


図11

次に、教師は、《行為》0.24、《感情》-0.14、《思考》-0.40である。教師は《行為》0.24となっており、《行為》について語る事が全体の平均より多くなっている。《思考》については、-0.40と全体の平均よりも低く、語る事が少なくなっている。

その他の人々は、《行為》0.31、《感情》-0.04、《思考》-0.83となっている。全体の平均よりも0.31高くなっており、《行為》について語る事が多くなっている。《感情》は-0.04と全体の平均ぐらいであるが、《思考》は-0.83となっていて、《思考》についての語りが少なくなっている。

③ 《要素》の分布結果

図12は、《要素》の分布結果である。治療者は、《思想》0.41、《技法》-0.07、《理論》-0.24である。《思想》について語る事が全体の平均より+0.41と多くなっている。少し予想外であるが、《理論》についての語りが-0.24と少なくなっている。

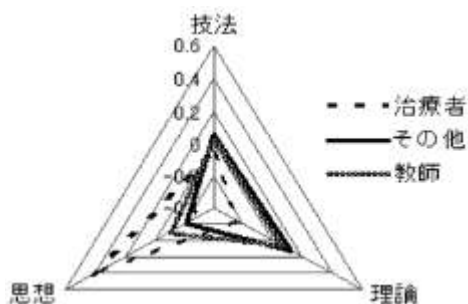


図12

教師は、《理論》0.06、《技法》0.008、《思想》-0.09となっている。一番高い要素は、《理論》0.06ですが、全部の要素において、ほぼ全体の平均値となっ

ている。

その他の人々は、《理論》0.12、《技法》0.05、《思想》－0.21 である。《理論》0.12 と《理論》について語ることが多くなっている。しかし、《思想》については全体の平均より－0.21 と語りが少なくなっている。

以上のようなことから、治療者は、全体の平均よりも「《人々》0.38、《思考》1.64、《思想》0.41」となっており、「《人々》、《思考》、《思想》」を使って多く語っている。特に、全体の平均よりも高い値を示している《思考》については、それらを多く使って語っているということであり、ここに、治療者の特徴が出ている。

教師は全体の平均よりも「《人々》0.29、《行為》0.24、《理論》0.06」となっており、《人々》、《行為》については、全体の平均よりもやや多く語っており、《理論》については全体の平均ぐらいということが教師の特徴である。その他の人々は全体の平均よりも「《自分》0.35、《行為》0.31、《理論》0.12」となっており、全体の平均よりも少し多く「《自分》、《行為》、《理論》」について語っている。

④治療者のアドラー心理学理解の代表例

治療者のアドラー心理学理解の代表例として、Fさんを取り上げてみる。次に示すようにFさんの個人のグラフは、治療者の平均値に一番近い値を示すグラフである。(図13、14、15)

Fさんの実際の語りの一部を記す。

「その人の行動とか、感情の動きとかを確認すると、ものすごく理論通りに現象が起きているというように思えて、すごく面白かった。そういう風に理論に当てはめて、現象の部分の行動を理論に当てはめて検証していくのをやっていくうちあるときからたぶん身についたんだと思う。そういう風に見えることが当たり前のようにになっている。」

「話を聞いていて、思わず『うんうんそうだ』と、うなづくような形で、あるいは『なるほどね』という言葉がでるような人といっぱい出会った。自分が貰ってきたことをそのまま返せるというような形の付き合いができる友達が増えている。」

治療者の語りの特徴をまとめると、治療者は「《人々》・《思考》・《思想》」について多く語っている。特に、全体の平均よりも高い値を示している《思考》については、それらを多く使って語っているということになり、ここに、治療者の特徴が現れている。

《相手》の分布では、《人々》が高いのは、治療者は人々に対して治療を行うことを職業としているので、《人々》に対して関心が高く、それに関係する

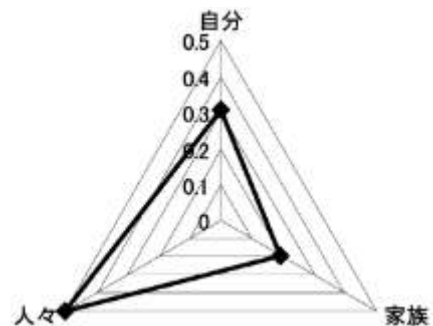


図13

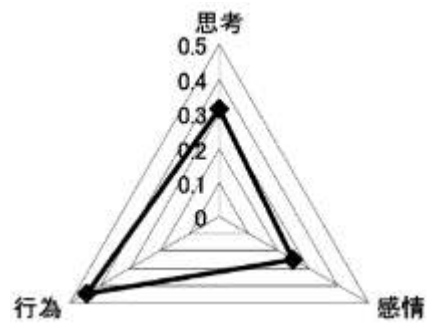


図14

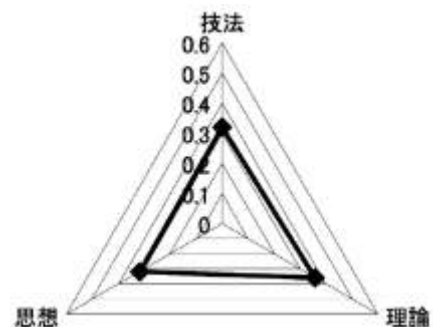


図15

語りも多くなっていると考えられる。

《機能》の分布では、《思考》が高いのは、例えばカウンセリングの場面では、治療者は思考していることが多くなり、それについて語ることが多いと考えられる。

また、治療者にとって、《思想》は根底にあり、核となっているものであるから、それについての語りが多くあり、その中で《技法》や《理論》があると考えられる。治療者はアドラー心理学を使い込んでいるので、《思想》についての語りが多くなっているともいえるのではないだろうか。

⑤教師のアドラー心理学理解の代表例

教師のアドラー心理学理解の代表例として、Vさんを取り上げる。次に示すようにVさんの個人のグラフは、教師の平均値に一番近い値を示すグラフである。(図16、17、18)

Vさんの実際の語りの一部を記す。

「誰かと一緒に何かをするという感じが多いかな。尋ねられたことは答えるのと、久しぶりに会う友だちとは、近況報告をし合って、どんなふうに話をする。みんなが同じぐらいしゃべってにこにこ笑って帰れる感じを実感とかをみんなで作っている感じだと思います。」

「自分のやっていることに責任を持つ。自分のやっていることを自分で決めている。自分が考えていることや思っていることは、相手の人に伝えるときには、表現をするっていう方法を選ぶ。」

「あの人、こんなことしたから、こんなことしながら、次こんなことするで一とかね。こんなんで一。とか。ごそごそ言っていたら、当たったり。当たるというのは、失礼やけれど。観察がそのまま、言葉が出たことが、あっそうだったなあと思ったりすることがある。人を観察するのは、とっても楽しい。」

教師の語りの特徴をまとめると、教師は全体の平均よりも「《人々》0.29、《行為》0.24、《理論》0.06」となっており、《人々》、《行為》については、全体の平均よりもやや多く語っていて、《理論》については全体の平均値ぐらいであるということが教師の語りの特徴である。

教師は人に対応することが多いので、それについて語ることが多くなっている。また、教育の中では《家族》ということが大切にされていることもあり、それが語りの中で1つの価値となっているが、《自分》のことについては、語りが少なくなっている。教師は、自分がどのように動くのか、自分のできることは何かを考えるので、《行為》を通して語ることが多いと考えられる。

教師は、日常で起こっている事柄を《理論》でもってどうにかしようと考え、実際に目の前で起こっていることについては《技法》を使って解決しようとしていると考えられる。

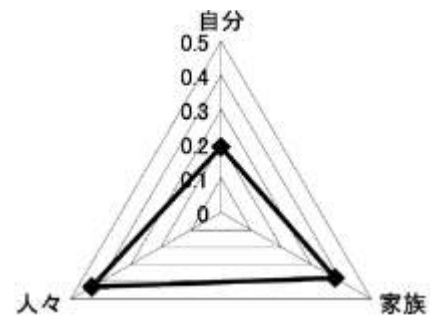


図16

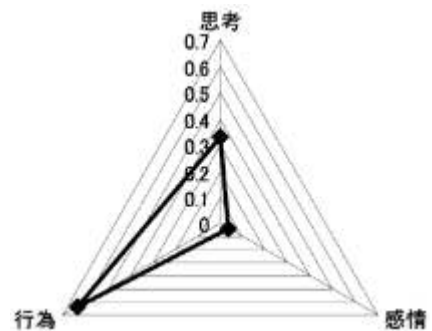


図17

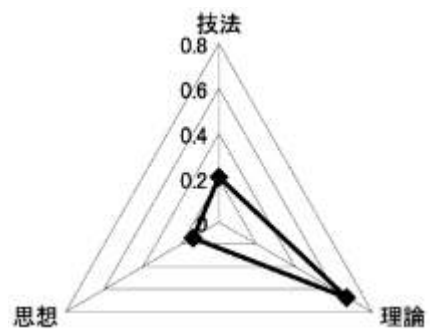


図18

⑥ その他の人々のアドラー心理学理解の代表例

その他の人々のアドラー心理学理解の代表例として、Mさんを取り上げる。Mさんの個人のグラフは、その他の人々の平均値に一番近い値を示すグラフである。(図 19、20、21)

Mさんの実際の語りの一部を記す。

「どうしようとあまり迷ったりとか、思うことがあんまりなくて、自分を出したりとかもしたかったりもするから、感情が動いたようなことを相談したりするんですけども、大きく進む道みたいなのが、見えてきたような感じで、そういう意味ですごくやりやすいし、楽しく暮らせるし、いいなって思います。」

「なんか迷ったりだとか、困ったりしたときに、どんなふうにかえていったらいいのかとか、というのが分かりやすくなったということなのかなあ。道筋を外れないようにする工夫をなんかいっぱい教えてもらっている気がして、それがよかったのかなあ。教わった理論で考えていると、ちゃんとそのとおりになる。本当に科学的だなんて思うことがよくあって。」

その他の人々の語りの特徴をまとめると、その他の人々は全体の平均よりも《自分》0.35、《行為》0.31、《理論》0.12となっていて、全体の平均よりも少し多く《自分》、《行為》、《理論》について語っている。

日々、家庭に身を置いている時間が多くなっているのだから、自然に、《家族》や《自分》に対する語りが多くなっている。《人々》について語るよりも、まず《家族》や《自分》のことについて語ることが多い傾向にある。

その他の人々は、教師と同じく、目の前の家族に対して、自分がどのように動くか、自分のできることは何かを考えるので、《行為》について語ることが多いのではないかと考えられる。



図19

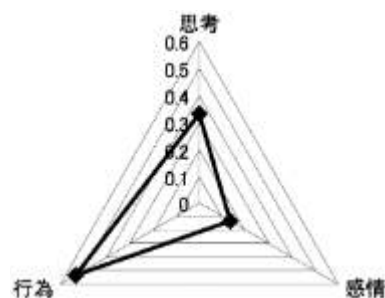


図20

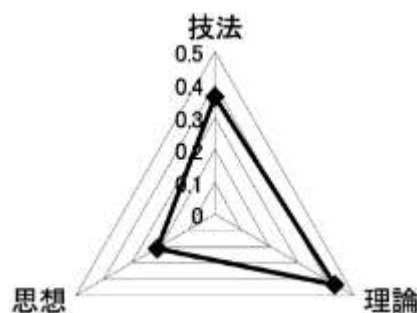


図21

6. 考察

(1) 個人によって受け取られている物語

今回の研究では、性別、業種別に分類したが、個人のローズグラフに返って見た場合、その形があまりにも違うものがあった。これは、個人によって受け取られている物語の部分であると考えた。例を挙げて説明する。

図 22 で取り上げているのは技法についてのものである。ここに取り上げているのは男性で、教師である。真ん中に点線は、技法について全体の平均を

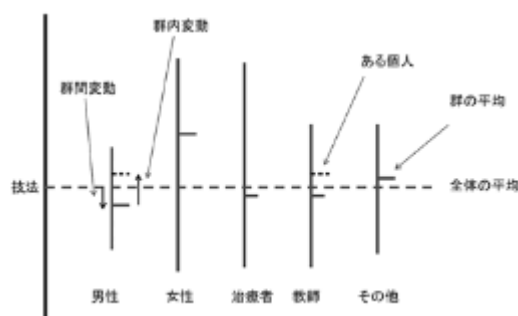


図22

示している。全体の平均から、下に向けて矢印が伸びているところまでが、男性の技法の平均である。この矢印は「群間変動」を表しており、全体の平均からいうと男性の平均はどのようになっているかを表したものである。「群間変動」は平均より下を向いているので、男性はあまり技法を使わないことを示している。男性の平均から上に伸びている矢印は、「群内変動」で個人によって受け取られている物語の部分を表している。この「群内変動」は全体の平均を超えて上を向いており、この方は技法を平均よりも多く使っているということになる。

また、この「群内変動」が大きければ大きいほど個人のローズグラフとそれぞれのローズグラフの形は異なっているといえる。

(2) 性別で分類からの考察

① 《感情》について

男性の語りの特徴をまとめると、男性は「《人々》・《感情》・《思想》」について多く語っていた。そして、特に《感情》についての値が高いので、その点に注目し、男性は、感情についてどのように語っているかということについて他の男性の例も加えながら、考察を試みる。

男性的な語りの代表であったRさんの語りは、P●に示している実際の語りから読み取れるように、そこからは、「感情を観察する」、「感情の目的を考える」など内容が語られている。

Aさんは、「自分の感情の動きを気にして暮らしていると、喧嘩することもあるけれど、それなりに口げんかぐらいで終わる」と「感情を観察する」について語っており、Fさんは、「その人の行動とか、感情の動きとかを確認する。ものすごく理論通りに現象が起きているというように思えて、すごく面白かった。」と「他の人の感情を観察する」について語り、Tさんは、「日常生活も楽になったんやろうね。前ほど感情を使わなくて、力んでも相手に通じないというがはね、すごく分かる。」と「感情を観察する」について語り、Wさんは、「感情というのは、暴走すると、自分の外側の問題というのがよく分かった。確かに、怒りとか、悲しみとかいうものが、僕の意識で制御できなくて、起こってくるけれども、それをつかむか、つかまないかは、選べるんだ。感情の中まで、入ってっちゃうとか、入らないとか、そういうことには、ならない。」「怒るとき、怒ってやるぞとって、怒るのがものすごくよく分かるようになったんです。怒らないと決めたら、怒らないでおけるし、怒ろうと思ったら、怒れるし。怒る自由が出来てきて。」と「感情を観察する」、「感情のコントロール」について語り、Yさんは「不安とか、そういうものが減っていった。不安とか、緊張とか、そんなものが、僕の中には強くあったんですけども、それがまあ、かなり減った感じがします。」「自分の感情の目的を考えるというかな。ちょっとむっとなしたりすることがあると思うけれども、自分が何を言いたかったんだろうとか、上手く対応ができなかったときね、そのとき、ちょっと冷静になれるところでなりたいというのもある。」と「感情を観察する」、「感情の目的を考える」について語られている。

このように、男性の語りの内容は、「感情を観察する」、「感情の目的を考える」、「感情のコントロール」などについて語られていて、「感情を観察する」ことについては、インフォーマントが共通の話題として持っているものである。また、男性の語りは「～だから、～だった」などのようにその状況や理由を客観的に説明している傾向にあると考える。

一方、女性は感情については、どのように語っているのか。男性と同じように語っているのか。例を挙げながら、比較をする。Bさんは、「気持ちを引きずったりだとかというようなことが少なくなった。」、Cさんは、「感情の動きを気にしていると、大きな親子喧嘩とか子どもとの関係がすごく悪くなるといったことはあまりなかった。」、Gさんは、「勝ち負けじゃあないと、学んだことはすごく大きい。楽になった。そういう意味では、すごく楽になった。勝ち負けではなくて、協力したりとか、一緒にがんばろうって。」、Sさんは、「家では感情とかも使っている。」

と「感情を観察する」について語っている。Vさんも、「向こうもこちらも大きく感情を表して、相手に対するような表現方法もないですし、まあ、穏やかに暮らしています。そのことをちゃんと、口に出して言うと、彼女は私との関係では感情的にならない。」と「感情を観察する」について語り、Xさんは、「感情的になることが少なくなった。いらないので。かなあ。」と「感情を観察する」について語り、AAさんは、「感情的になることはあるんですけども、感情的に行動するってことは、ほとんどなくなりました。」「感情が動くとき、悲しい感情だったり、怒りの感情だったり、何が、これって何の目的であるかと考える。」と「感情を観察する」、「感情の目的を考える」について語られている。BBさんは、「感情が動くということは、自分のライフスタイルに隠されているような強い願いがあるに違いないからと思うようになっていい願いがあるに違いないと、なんか、そういうふうに住いたら、そんなに関係が悪くなく、私の受け取り方が変わっているような感じがします」と「感情を観察する」ことについて語られている。

このように、女性の語りの内容は、「感情を観察する」など男性と同じような傾向であり、男女のインフォーマントともに、共通の内容として挙げられる。量的に、多い少ないはあるが、「感情を観察する」ことについては、全てのインフォーマントの話の内容に入っている。

しかし、女性の感情について語りは、男性と比較すると、主観的に自分のこととして語ることが多いのではないかと考える。

②《技法》について

女性の語りの特徴は、全体の平均値よりやや高い値で「《家族》・《思考》 / 《行為》・《技法》」について語っている。その中から、特に《技法》についての値が高かったので、女性は、《技法》についてどのように語っているか、他の女性の例も加えながら、考察を試みる。

女性的な語りの代表であったLさんの語りは、P●に示している実際の語りから読み取れるように、そこからは、「目標の一致」にかかわって、実際、どのように動くかという《技法》が語られている。

Bさんは、「起こっている印象、事柄と感情とを分けて考えるとけりをつけやすくなった。」と「課題の分離」について、Cさんは、「具体的な内容で、すぐに役に立つことができた。」と「パセージ」について、Hさんは、「よりよく子どもが育ってほしいなあと言うようなどっちかって言うと便利なものだった。」、Iさんは、「勇気づけでしょ。一番最初が、開いた質問でしょ。それと、語るというものがあった、聞く、というものがあった、聞くってどんなことなんだろうと思って、それから、共同体感覚っていうのもあったし、私の興味執着とか、信じる力というものもあったし、信頼というのもあったし、私にできることと私にできないことっていう時期もあった。」、Jさんは、「私は、こうしたほうがいいと思うんだけど、というのをまあ、引っ込めて、どう思われますかって、選択肢を入れるとこんな風に考えられますけれども、他にも、どう思われますかっていうふうに、話を聞くっていうことを第一に考えるように心がけていると、保護者の思いだとか、生徒の思いだとか、若い先生の思いだとか、そんなことも、全然私が想像していたのとは違うということが、しょっちゅうあって。」、Mさんは、「話を聞くっていうこととか、ネガティブなことに注目しないとか、勇気づけをしていくとかもってやれるようになりたいなあっていう気持ちがあって、やってみたりしています。」というように「話を聞く」ということについて、自分の経験してきたことをもとに具体的に《技法》について語られている。

一方、男性は、どのように語っているのか、取り上げてみる。Aさんは、「相談できるようになった。」、Fさんは、「さまざまな生きるための工夫というか、そういう技法的な知恵もいっぱいアドラー心理学はある。」、Rさんは、「お互いに聞く練習にもなります。」、Tさんは、「大事に持っておきながら、使える場所に出せる1つのものとして考えたら、今はちょっと引っ込んでい

て、ちょっとこっちを使う、それが、いいなあと思う。」、Wさんは、「自分の基礎的な物の見方、考え方、やり方だと思う。」、Yさんは、「課題の分離ができていないか、目標の一致ができていないか、自分の感情の目的は何かを点検するということ。」というように《技法》を広く大きく捉えて語っている。女性のように、具体的に細かく一つ一つの《技法》について、語ってはいない。

(3) 業種別で分類からの考察

業種別で分類では、インフォーマントを「治療者」、「教師」、「その他の人々」に分けて、それぞれの職業の違いによって特徴的な事柄を示した。この中で、治療者は「《人々》・《思考》・《思想》」について多く語っている。特に、全体の平均よりも高い値を示している《思考》については、それらを多く使って語っているということになり、ここに、治療者の特徴が現れていた。そこで、《思考》について、どのように語っているか、他の治療者の例も加え、具体的に言葉を拾いながら考察を試みる。

治療者の語りの代表であったFさんの語りは、P7に示している実際の語りから読み取れるように、そこからは、アドラー心理学についてどのように考えるかという《思考》について語られている。

Bさんは、「共同体感覚に基づいた生き方をしようとか、自分が何を実現したいか、どういふふうに生きていきたいか。周りの人たちに貢献的とか、周りの人たちと協力的に暮らしていくことだとか、地球環境に悪い影響を与えないように生きていくこと。」、Cさんは、「人々は仲間であるとか、自分には能力がある、すごく頭の中にあつた。迷った時には、じゃあーどうしたらいいのかなあと考える指標。すごく考え易かった。することができた。」、Dさんは「客観的に自分のこととか周りのこととか人生とか世界とか見えるようにちょっとずつなってきたような感じがある。」、Eさんは、「知らないよりも楽に生きているというか、力を抜いて生きているかもしれないなあという感じがある。」、Wさんは、「目標追求しなくなることだったり、なんで目標追求しなくなるかという、結局、優越の位置にある平等の位置をもう1回はっきり思い出すこと。人間が、優劣とかじゃなくて、完全にこの世に受け入れられているなあということが実感できることだったりするわけ。」、Xさんは、「技術なことなんだけれど、技術というよりは、暮らし方のトレーニングじゃないかなと。技術なことなんだけれど、お稽古。私の幸せはあなたの幸せというように同じように考えたりとか、私ができる責任は何かがあるからこそ、この枝葉が役にたっているんであって、それなくして、言いたいことが言えるようになるとか、だと違う気がするかな。目標あつてのトレーニングだから。」、Yさんは、「いわゆる自己否定ではなくて、自分は、不完全だから、たぶんなくなると。なくなると自体は問題ではないというか、間違えてかまわないということを受け入れられるということ。ただし、何を間違えたのかということの判断と、それをどんなふう集計していけばよいのかということに関する、基本的な方向性をアドラー心理学は与えてくれている感じがする。」とアドラー心理学の思想や理論を自分の言葉として解釈し、論理的に思考について治療者は語っている。

では、「教師」や「その他の人々」は《思考》について、どのように語っているか考察してみる。

教師のAさんは、「自分の生き方が楽になった気がしたが、やり続けていくうちに、責任があるというか、影響があるから、しっかりと考えてやらなければならない（と考えるようになった。）」、Gさんは、「指針。自分が生きていくうえでの指針というか師匠、バイブルみたいなものかな。いつでもどっち行ったらいいかなあと思うとき、やっぱりアドラーで考えるとヒントが出てくる。」、Iさんは、「いちいちあわてないでいられるというか、相手が言ったことに言ったことに、あれはどういう意味だろう、あたしに何をしたいと言っているんだろうと考えなくな

った。」、Oさんは、「クラスの子どもたちの力になれるような、指導していくっていうのかな。それはまた、いろんな手立てがあったりするのには必要だと思うけれども、その中のバックボーンにアドラー心理学があればいいかなと。」、Tさんは、「いつもそこに立ち返って、人間関係のこととかで、しんどいなと思ったときに、そこに立ち返って、バックボーンではあるから、アドラー心理学の仲間にも助けてもらって、自分の解釈とか、理解では及ばんものを補ってくれる人たちがやっぱりおるから、すごく助かる。」、Zさんは、「何が足りないかではなく、あるものをどう使うかとか。そういうことって、やっぱり、いつもどっかにあって、何か問題がというか、何かやらなければならない問題があったときに、どんなことができるかなといつも考えるということは、やっぱりね、それは、やっぱりね、考えだしていく過程が楽しい。」、DDさんは、「自分の生き方っていうのを振り返ったり、いろんな指針っていうかね、決める土台にしているのは確かですね。」というように、いろいろなことが起こったときに、根底にあるのはアドラー心理学の考え方であり、それを使ってどのように考えているということを教師は語っている。

その他の人々のKさんは、「十分ではないんですけども、今では、生活の全てと言うか、指針であり、指標であり、生きていくうえでの方法でありという、なんか道図絵というか、人生の。そんな感じです。指標と言うのが共同体感覚っていうのがすごくいいなって。」、Mさんは、「この人も勇気がくじかれていますんだなあとか、自分が何かを考えたり何かをしたりするときに、全体論とか、目的論とか、対人関係論、絶対今起きていることは、自分がかんでいる。地上から降ってきているんじゃないなくて、あたしが何かやっているからこうなっていると、そういう教わったいろんな知恵を一見、混沌としている、起こってくる現象とか起きたトラブルとかの中で、次にどう進もうかを考える。」、Pさんは、「何よりもまず地図みたいなのがあって、暮らしているというのがあって、そういう点では、生きやすいかなあみたいなど。」、Qさんは、「アドラーの思想に基づいて立ち返らなくてはならない。さらに立ち返って、どうすればいいかとか考えると一番安全に人間らしく生きられるというのはある。そんなふうにあまっていますね。」、Rさんは、「共同体感覚という方向をもって生きていくということがすごく素敵で、その中の思想がぼんやり考えていたことと合っていたんで、非常に良かったなと。」、CCさんは、「どこかで迷ったときに、アドラー心理学の羅針盤があったら、どっちの方向に行ったほうが、より旅のものにとっていいかなと、お供がおったら、迷わさんように、できるかもしれんし、自分の行きたいところも、行けるかなあ。」と自分の生活の中にどのようにアドラー心理学の考え方を取り入れているかをその他の人々は語っている。

業種別での分類において、《思考》については、どの業種もアドラー心理学の基本的な考え方に基づいて考えていることは共通している点である。しかし、語り方には少し違いがある。治療者の語りは、アドラー心理学の思想や理論を自分の言葉として解釈し、論理的である。教師の語りは、いろいろなことが起こったときに、根底にあるのはアドラー心理学の考え方であり、それを使ってどのように考えるのかということ具体的に語っている。また、その他の人々の語りは、教師の語り具体的に語っているところは共通点であるが、話題が自分の生活の中にどのようにアドラー心理学の考え方を取り入れているかである。

7. おわりに

「語られたアドラー心理学」の研究では、「個性のあるインフォーマント」と「個性のないインフォーマント」に分け、それぞれの特徴的なことを考察した。その中から、いくつかの「個性のあるインフォーマント」の共通性が明らかにできた。《相手》の分布からは、現在の状況が語

りに影響している。《機能》の分布からは、個人のライフスタイルが影響している。《要素》の分布からは、アドラー心理学の熟練度が影響しているということであった。つまり、アドラー心理学で学んだことを自分の物語に取り入れていて、個々の語りがあり、それを思考優先とかと位置づけることはあっても、パターン化することはできないという結論であった。このような「語られたアドラー心理学」の研究があり、さらに、今回の研究で、性別、業種別に分類し、違う視点で語りを見たとき、異なる部分が見えてきた。「語られたアドラー心理学」の研究から本研究を含めて、明らかになったものについてまとめる。

まず、はじめに、各個人の語りの中には、インフォーマントが共通して受け取っている物語が存在する。それは、それぞれの要素の全体の平均としては現れているものであると思う。一人一人の語りの中でインフォーマントが共通して受け取っている物語と各個人の物語があることを明らかにできた。

それは、前回とは違う視点で、性別、業種別に分類してみるとにより、暮らしている状況による物語があるということが、さらに分かった。これは、要素ごとに特徴のある物語の受け取り方で、全体の平均とその要素の違いを数字にして示すことにより明らかになった。

性別では、「男性的なアドラー心理学理解の語り」の骨格は《人々》+0.63・《感情》+0.75・《思想》+0.26 であり、「女性的なアドラー心理学理解の語り」の骨格は《家族》+0.13・《思考》+0.09 / 《行為》+0.11・《技法》+0.12 であった。

また、業種別では、「治療者のアドラー心理学理解の語り」、「教師のアドラー心理学理解の語り」、「お母さんのアドラー心理学理解の語り」があり、特徴的なところを多く語っていることやそれぞれの語りの特徴も明らかになった。これは、男性であるか女性であるか、治療者であるとか、教師であるなどのライフタスクの違いによってある傾向性があった。

しかし、このようにライフタスクに分けても、さらに偏っているものがあつた。それが、個人によって受け取られている物語や個性的なライフスタイルによる物語であつたと考える。

本研究を進めていく中で、個人の三角のローズグラフと性別のローズグラフがどうしても似ていないものがあつた。どうしてだろうとずっと疑問であつたが、図 22 考察(1)でも述べたが、個人によって受け取られている物語や個性的なライフスタイルによる物語の部分があつたからだと分かつたとき、とても納得ができた。それぞれのインフォーマントによって語られた物語は、その場限りのもではなく、数値によって、共有できるものとなつた。これは、言葉がデータとなつて、目に見えるということである。また、語りを切り取る軸によって、同じデータでも全く違うものが見えてきたのである。

「語られたアドラー心理学」から本研究に至るまでの一連の研究は私にとって、更なる新しい視点の開拓でもあり、本当に得がたい学びの場であつた。このような貴重な機会をいただいたことに感謝して、本論を終了とする。

謝辞

本研究をここまで進めるにあたっては、たくさんの方々にも多大なご協力をいただきました。快くインタビューをお引き受けくださった皆様に心より感謝申し上げます。

また、「語られたアドラー心理学」研究の開始から本研究まで統計処理ならびに計算結果の解釈などについてご指導くださいました野田俊作先生に篤く感謝申し上げます。

そして、本研究を温かく見守ってくださったすべての方に感謝申し上げます。

参考文献

- (1) アーサー・クライマン著：病の語り 慢性の病をめぐる臨床人類学 誠信書房
- (2) 齋藤清二、岸本寛史著：ナラティブ・ベイスト・メディスンの実践 金剛出版
- (3) ウィヴィアン・バー著、田中一彦訳：社会的構築主義への招待－言説分析とは何か 川島書店
- (4) 野田俊作：ライフスタイル分析の新しい方法(1)現在の問題の語りなおし アドレリアン 21 (1) 1-10、2007
- (5) 野田俊作：ライフスタイル分析の新しい方法(2) アドレリアン 21(1) 113-125、2008
- (6) 野田俊作：ライフスタイル分析の新しい方法(3) 考察 アドレリアン 21(3) 215-224、2008
- (7) 井原文子：自助グループの個性と構造 アドレリアン、239、2008
- (8) 清野雅子：自助グループの構造と変容 アドレリアン 57、1-21、2008

更新履歴

2013年10月1日 アドレリアン掲載号より転載